

4年ぶりに日本人選手が参戦

オートバイの世界最高峰モトGP

中上貴晶選手



「小さいころからの夢だった。世界最高峰のモトGPはきつと世界一になりたい」と話す中上選手（2017年10月10日、東京都港区で）

日本のほかアメリカ、ヨーロッパなど世界15カ国、19のサーキットを転戦するオートバイのロードレース世界選手権の最高峰（さいこうほう）モトGPに2018年、4年ぶりの日本人ライダーとして中上貴晶選手（25）が参戦します。「4歳（さい）からレースをやってきて、世界のライダーになるのが夢だった」と勝利に向けて闘志（とっし）を燃やしています。

す。日本自動車工業会によると、オートバイの国内の販売（はんばい）出荷（しゅっか）台数は1982年度の約329万台をピークに、1996年度に約125万台、2006年度は約72万台、2016年度は約37万5000台に。理由には人口減少や若者がオートバイに乗らなくなったことなどが考えられますが、中高年の人が再び乗りだしたり、軽量級スポーツモデルの人気が高まったりするなど復活のきざしもあります。

中上選手には子どものころからのライバルで親友の宮沢祥也選手がいましたが、2010年9月、イタリアのサンマリノGPのレース中の事故でなくなりました。「祥也はとても良いライバルで、感謝しています。サンマリノではいつも祥也の思いを背負っている気持ちで走っています」と話していました。

オノも誕生しています。

日本のホンダ、ヤマハ、スズキ、カワサキの4メーカーもさまざまなジャンルのレースで優勝マシンを作ってきました。また、アジアでは仕事用の乗り物としてじょうぶでこわれない日本の小型バイクは人気があり、ベトナムではバイクのことを「ホンダ」と呼ぶほどです。

▽国内販売は減少

しかし、日本国内での売れ行きは減っているのが現状です。現在の世界選手権は250ccのモト3、600ccのモト2、1000ccのモトGPに分かれ、中上選手はモト2での好成績が認められ、チームLCRホンダからモトGPに参戦します。出身国の総合王者や、軽量級クラスを制した速いライダーたちと最高速度350キロでバトルします。中上選手は日本GPが



▽強い日本人選手
日本人選手が海外で活躍（かつやく）するスポーツはたくさんありますが、ヨーロッパで人気のオートバイレースでも多くの日本人選手が昔から活躍し、1961年に高橋国光選手が当時の西ドイツグランプリ（GP）の250ccクラスで初優勝。1990年代から2000年代にかけて多くの日本人選手が参戦し、現在とは異なるクラス分けだった時代の125cc、250ccでは年間総合チャンピ



2017年10月の日本GPのモト2予選でポールポジションを取った中上選手（栃木県茂木町で）

ロードレース世界選手権のクラス分け



モトGP
排気量（はいきりょう）1000cc、最高速度350キロ。メーカーが最初から作ったプロトタイプのマシンを使う。メーカーが運営する「ファクトリー」と呼ばれるチームが多く参戦。



モト2
排気量600cc、最高速度290キロ。エンジンは同じメーカーのものを使い、車体はいくつかのメーカーを使用。メーカーから独立したレーシングチームが参戦。



モト3
排気量250cc、最高速度240キロ。ホンダやKTM（オーストリア）などのメーカーからマシンを買った独立したレーシングチームが多数参戦。



2017年8月のイギリスGPのモト2で優勝した中上選手の走り（イギリス・シルバーストーンサーキットで）

ロードレース世界選手権 メーカーが一から作り上げるプロトタイプマシンを使うモトGPクラスはマシンの値段は億単位とされ、メーカーの「ファクトリー」と呼ばれるチームが中心。ホンダ、ヤマハ、スズキの日本メーカーのほか、ドゥカティ（イタリア）、アプリリア（イタリア）、KTM（オーストリア）が参戦。モト2（600cc）やモト3（250cc）はメーカーからマシンや車体を買った独立チームが中心で、運営費用を抑えて新人の登竜門（とつりゆうもん）のクラスになっている。



月資源を調査へ 20年、探査機で着陸目指す

「ちょっとビックリ!？」

不思議なおいの組み合わせ シナモン+レモン+ライムでコーラ?

多くのモノには、においのもとになる化学物質がたくさんふくまれています。例えばコーヒーには300種類もあります。こうした物質は、組み合わせによっては予想もしなかったにおいになったり、いやなにおいが別のにおいに変わったりします。



日本科学未来館（東京都江東区）の展示「匂（におい）の不思議」

古本からはバニラのにおいがする。バニラのおい物質「バニリン」がふくまれている



話すのは、出展者で東京大学大学院教授の東原和成さん